

提唱 槐安国語鈔講話(十三)

頌古

第十則 古仏露柱

白田 劫石

垂示に曰く、高きに登って招くときは、臂^{ひじ} 長きを加うるに非れども、而も見る者遠し。順風に呼ぶときは、声^{はや} 疾きを加うるに非れども、聞く者^{あきら} 彰^{よしや} かなり。輿車^かを仮る者は足を利するに非れども、千里を致す。舟楫^{しゅうしゅう}を仮る者は水を能くするに非れども、江河を絶つ。

見性して諸法を見る、眼 濶きを加えざれども而も大千界を貫照す。透過して言句を吐く、機 嶮なることを加えざれども而も時の人^{うかが} 窮^ううことを得ず。何が故ぞ？ 猛獸嶮を失すれば、童子^{げき}靴^のを曳^はべて之を追う。蜂^{ほう}臺^{たい} 袖に入れば、壮士^{ほうこう}も彷徨として色を失す。

本則は、雲門大師^{こうきせんじやく}の紅旗閃爍の宗風の一則で、一見何でもないように見えながら、脚實地にこれを手に入れるとなると、容易ならざるものがある難透の則である。

本則の宗旨は、諸法交参であるが、耕雲庵老漢は、『新編碧巖集講話』で同じ宗旨の則として「塵々三昧」の一則を配している。

これは大変親切な法の扱いで、本則の「垂示」に入る前にこれにふれておきたい。

塵々三昧とは、『華嚴経』の賢首品の「一微塵中 三昧に入る。一切微塵の定を成就して、彼の微塵も亦増さず、一微塵中に於て普

く難思の刹せつを現す」の意を含むもので、ごくわずかな一微塵の中にも、量り知れない多くの世界が蔵され、その微塵の一つ一つが悉くそのような実相を含むというものである。

つまり塵々三昧とは、この宇宙の一一の事々物々が、箇々円成して、凡聖同居 龍蛇混雜のすがたを示している諸法実相を示したものである。

それではその塵々三昧の当体とは一体何か？

『碧巖集』では、これに関して、雲門大師は、“如何なるか是れ塵々三昧？” という僧の問いに対して、“鉢裏飯はつりはん 桶裏水つうりすい！” と答えている。

これは、飯びつの中には飯があり、水桶の中には水があるさ、との意であるが、そんな何の変哲もないごく当前のことが、何故塵々三昧の当体なのであろうか？

こいつばかりは、到底世間の眼では見るできない。どうしても見性の眼を具さねばならない。

そこで白隠老漢は、本則の「垂示」で、見性というものがもつ越格の見地や機用を掲げるのである。

「見性して諸法を見る、眼 濶くわきを加えざれども、而も大千界を貫照す。透過して言句を吐く、機 嶮けんなることを加えざれども、而も時の人窺うことを得ず。」

まことに直指人心見性成仏は、達磨大師直伝の一枚看板であり、見性というものを離れて、禅の修行はない。

世界の宗教や思想にどんなに多様な功德があっても、この見性の一著子を得しめるものは、祖師禅以外にはない。禅が世界に冠絶する所以は、正にここにある。

最近 禅についていろいろと書かれ語られているが、それらは畢竟この見性の一事を得しめるものでなく、従って画餅の域を出ず、真の祖師禅そのものからは遠うして遠い。

元来この見性は、すべての言思を絶しており、生死の我見を布団上で殺し尽して、大死一番 絶後に再蘇する以外は、得ようがない。言葉で語られ、思念によって考えられる分際では、到底かいまみられないのである。

白隠老漢は、この見性を、高山に登って見る景観や、風に従って呼ぶ声や、車に乗って行く里程等に譬える。

見性によって開かれた道眼というものは、一般の世間の人の見えない、尽十方法界を見渡すことのできる宏大な智慧の眼なのである。

しかもそれは、非日常的な超能力や人間の能力をこえた摩訶不思議な神秘的な力ではない。

この極く当り前の平凡な日常生活が、そのままその真実相を現わす。それは、決してこの世とは別な別世界の消息なのではない。こここのところが何としても尊い。

一般に宗教というと、すぐこの現実の世間とかけ離れた別世界のことと思い、彼岸の信仰によって救われると思う。それは畢竟、幻想の世界にすぎない。

さてこの見性こそは、人生の基本をなす第一議であって、もしこやつがないと、天下を掌握する英雄豪傑も、ものごとの本末始終を明らかにすることができず、たあいのない事にうろたえて、一瞬にして足もとを奪われてまう。

「猛獸 嶮を失すれば、童子靴を曳べて之を追う。蜂 蝮 袖に入れば、壮士も彷徨として色を失す。」

これは、どんな英雄豪傑も、蜂やさそりが袖に入ってもうろたえる、つまらぬ慾の一念で、道を見失って、あたふたと右往左往する有様をいったものである。

何がほんとうに正しいかを決着するものは、見性による如是法の悟得以外にはないことを知るべきである。

拳す、雲門垂語して云く、古仏と露柱と相交わる、是れ第幾機ぞ？

自ら代って云く、南山 雲を起し、北山 雨を下す。

「垂示」においては、見性の力用について述べられたが、元來見性に二つはなく、無二亦無三ではあるが、人々の得力や境涯の実際についてみると、そこに浅深があって、古來から幾つかの階程に分けられている。

わが教団では、これを見性入理・見性悟道・見性了々の三段階に分けている。

これを華嚴の四法界に配すれば、理法界・事法界・理事無礙法界・事事無礙法界となる。

本則は、見性了々底の事事無礙法界の一則である。

垂示では、これを塵々三昧としたが、『華嚴經』の入法界品では、この事事無礙法界が、帝釈天の善法堂前の風光によって譬えられている。

この法堂前には、摩尼珠という水晶のような珠を以て飾られた網の瓔珞ようらくがかけてある。その珠は、互いに光りあい、映じあって、その一つが百千万億の他の珠の姿を含みあいながら、交映重々 主伴無尽で絶妙な景觀をつくっている。

我々の住むこの宇宙も、これと全く同じで、一事一物の法が、一つ一つ独立し円成していながら、その中にすべての他の無量の法を蔵し、互に円融交参しているのである。

このような諸法の実相は、見性の眼によってはじめて見ることができるが、それは到底見性入理の分際では見えない。

白隠老漢は、「評」で次のように述べておられる。

「今時往々に言う、雲門大師平生、平等大恵不二の法門の真理を説き、以て末代の衆生の有相差別の釘橛ていけつを抜却して、究竟安樂 身

心軽快の田地に到らしむと。錯！錯！ 此れは是れ深重最大の悪妄想・邪見解、大いに後昆の悟門を妨ぐ。者般の迷人、日に七八箇を打殺するも何の罪か有らん。殊に知らず、大師の此の語、天に靠る長劍の如し。」

これは本則が見性入理などの悟得底では到底見えないこと、悟り了って未だ悟らざるに等しいところなるを明らかにしたもので、ここで「天に靠る長劍」とあるは、巴陵三転語の吹毛劍の切れ味に比べえよう。

古仏と露柱と相交わる、是れ第幾機ぞ？

これは、番々出世の老古仏と、真黒々の大黒柱が相撲をとったら、どんなことになるかとの意である。

これは妙な垂語であるが、白隠老漢の下語についてみてみよう。

【七九六十三】何？ 古仏と露柱と交る？ そんなことは別に珍しくも何ともない、ごく当前のことじゃ。

そういうが、これはなかなか見えない。八角の磨盤空裏に走る、という有様、悟得底も木っ葉微塵じゃ。

又【母在らば一子寒く、母去らば三子寒し】これは中国の話で、継母を離縁しようとする父を諫める孝行息子の言葉である。離縁しなければ、自分は継母にいじめられてつらいが、離縁すれば異母兄弟の三人が悲しい憂目に通う。自分は我慢すればよいので、どうかこのままにしてほしいとの真情である。

苦しい現実をそのまま変えないで、苦がそのまま楽であり、楽がそのまま苦であるという諸法交参の実相を述べた。まことに含蓄が深い。

さてこの垂語に対して、誰も対えうるものがなかった。そこで雲門大師自らが代語された。

自ら代って云く、南山 雲を起し、北山 雨を下す。

この代語の玄旨は、一言半句言葉を添えることはできない。よい

気になって、べらべらと喋ると、玄旨をとり逃してしまう。まことに寒毛卓豎の場がある。法を識る者は畏る。

『碧巖集』の評で、円悟禅師が、その後の問答についてふれている。

「僧問う、未審^{いぶか}し、意旨如何？ 門云く、一条の條^{とう} 三十文にて買う。」

條というのは、組み糸で、いろいろな色の糸で編み上げられたもので、それを三十文で求めたというのである。組み糸は、編まれている一本一本の糸は、それぞれ違った独自の色ものであるが、それが編まれて奏でる絶妙な綾の調べは、何ともいえず見事で、その一つ一つの糸では現わしえない華嚴のメロディを作り出す。

ここの下語。【巢は風を知り、穴は雨を知る】巢と風、穴と雨は、全く無関係の別箇のものだが、それが相手を知って、諸法の交わりの絶妙なすがたを示している。自然のもつ法爾な和の実相である。

【楊脩、幼婦を見ること一遍、便ち妙を知る】これは、中国の故事で、楊脩という人が、「黄絹幼婦 外孫壻^{さいきゆう} 曰」の碑文を一見して、「絶妙 好辭」と判った。「黄絹」は糸で「絶」、「幼婦」は少女で「妙」、「外孫」はよき物で「好」、「壻」は塩漬の菜で「辛」、曰は物を受けるもので「受」。つまりは言語を絶した絶妙な当体を一見弁見してとるの意である。諸法交参の実相を見て、ハッとするところである。

頌に曰く

古仏光中 第幾機ぞ

南山雲外 人の知ること^{まれ}少なり

千溪日^く晩れて樵歌の路

かえりなんいざかえりなんいざ
 歸去来今来去歸

大灯国師のこの頃は、余り弁をつけない方がよい。吟じ来り吟じ去って、深く深く噛みしめるがよい。下手な弁をつけると、折角の味が台無しになる。

そこでザッと講じることとする。

要するに、もとの素凡夫にかえて、凡聖同居 龍蛇混雜の実相、苦楽・美醜・善悪のあざなえるすがたの絶妙な味を噛みしめるのである、ここは知音がない。五十年つれ添うた皺だらけの婆さんに惚れなおすところである。

古仏光中 第幾機ぞ

先ず本則の公案の宗旨を真っ向うに提示した。「古仏と露柱と相交わる、是れ第幾機ぞ？」こうなると、雲門のものではない。大灯国師自身のものである。だから白隠老漢も下語して【第二重の公案】【三重も亦在り】と置く。三重とはわしも提示するぞとの意である。

又【一九と二九と相逢うて手を出さず】と。これは、『五雜俎』の語で、冬至後の寒さを言ったもので、九日を一周として区切り、最初の九日と二番目の九日とは、寒いので手を出さず懐手をする。三九と四九では炉を囲んで酒を飲むというのである。

古仏と露柱と出逢ったが、寒くて手を出せず、互いにうなずくのみである。

互いに知音同士であるが、ここはどうしようもなく、語が出せぬ。

南山雲外 人の知ること少なり

雲門大師の代語「南山 雲を起し、北山 雨を下す」この絶妙の一著子、こやつは知音がない。

この「南山雲外」の「外」の一字実に含蓄が深い。言思を絶し、悟得底を離れている。法のかけらもない。ここの下語。【知不知 疑不疑 三生六十劫】知ったというも知らずというも、疑も不疑も、総にスカタン、永劫に手に入らぬ。【謹んで賀す、国師のみ有って 親しく了知することを】そんなら国師は、これをご存知か、それは

またお目出度い、とやじった。

「知る」に対する拈語である。こやつばかりは、如何にしても知ることはできないのである。

白隠老漢は、「評」の中で述べておられる。

「^や已んぬるかな、今人は人の知ること多からんを愁う」これは、禅について語る多くが、見泥の獄に入る禅学に堕ちているのを指したものである。

千溪日晩れて樵歌の路

歸去来兮来去歸

谷を越え川を渡って尋ねても、獲物は何一つない。だんだんと日は暮れてくる。木こりの歌をしるべに家に帰ろう。ヤレヤレ畢竟無駄骨折りであったわい！ 最後の結句は、陶淵明の『歸去来の辞』の語で、初めから読んでも、終りから読んでも同じである。

悟得底の荷物をすっかりと肩からおろして、古仏露柱の交参の味を心ゆくまで噛みしめているところである。

転句の下語。【日上って岩猶暗く、煙消えて谷尚^{くら}昏し】これは『寒山詩』の句で、日が上がり、霧がはれても、ここまでは陽の光が届かない、人跡未踏のところである。

この結句の下語。【脚跟下未だ地に点ぜざるに、見よ！ 走って何れの処にか去る】脚下を離れて何処へ帰って行くのじゃ。帰る先などあるのか、という拈語である。

又【^{じょうたいじんきゅういつき}上大人丘乙巳】これは中国の「いろはにほへと」で、本則の落処を示した。といっても、これは見えぬ。

白隠老漢は、「評」の中で、「千溪日晩れて樵歌の路 歸去来兮来去歸 これ何の道理をか説く？ 如何んが齒牙を挟み得ん？ 謂うこと莫れ、前頭は打徹了、後頭は打未徹と。殊に知らず、後箭は猶軽く、前箭は猶深きことを。何が故ぞ？ 嘉州の大像 拇指を咬断す」といわれる。

如何なる玄妙な道理もここには届かぬ。如何にしても歯牙を挟むことができない。

ここに嘉州の大像とは、嘉州にある孔子像のことであるが、さし当たっては奈良の大仏じゃ。この大仏が拇指を咬み切ったというのである。これは又何のことか？ よほど恨めしかったか、コン畜生奴！ と虚空が歯ざしりをしたか？ この味が味わえぬと、本則は手に入らない。

著者プロフィール



ごつせき
白田劫石（本名／貴郎）

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科卒業。元千葉大学名誉教授。昭和12年、両忘協会立田英山老師に入門。人間禅三世総裁・師家。庵号／磨輒庵ません。平成21年2月帰寂。

『禅』32号正誤表

前号に次のような誤記がありました。ご執筆者をはじめ、読者の皆様に謹んでお詫び申し上げますとともに、次のように訂正させていただきます。

ページ	行	(誤)	(正)
28頁	14行目	東京第二支部(現埼京支部)	東京第二支部(現西東京支部)
52頁	10行目	是消滅の法なり。	是生滅の法なり。
62頁	8行目	鉗鎚(げんつい)	鉗鎚(けんつい)
78頁	下から3行目	5歳	4歳
	下から2行目	89歳	90歳
79頁	5行目	超えるか	超えるか!?
114頁	8行目	不欺の力	不欺の力!!